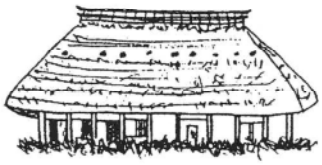
The Saitama Municipal Urawa Museum

みんかえんだより



第28号
2005.3

of Traditional Architecture News No.28

浦和くらしの博物館民家園館報

茅葺屋根復原！旧高野家住宅

▲茅をしっかりと締め付け、
葺いていきます

最後に軒部分を刈り込みます▶

旧高野家住宅(せんべい店)移築復原工事の進行状況　－2－

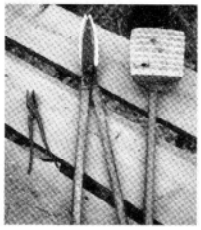
上棟式を終えると、大工のほか茅葺職人や壁職人などが入って、作業が始まります。今回は、それを中心にお伝えします。

◆茅葺屋根

軒周りに足場を組み、竹を棟と平行に何本も渡し、わら縄でサスに結び付けていきます。これをヤナカと呼びます。竹は真竹を使います。次にヤナカの上に直角に交差するよう竹を載せ、わら縄で結わえ付けます。これをタルキと呼びます。タルキは竹の太い方を下、すなわち軒になるように載せます。このタルキの張り出し具合で、軒の出が決まります。竹を縦横に組んだ、格子状の屋根の下地ができあがります。

▲屋根の下地

次にいよいよ茅葺作業です。軒から棟に向かって葺いていきます。まず、4つ角部分にわら、その上に茅の束を載せて固定し、厚みを決めます。屋根のヒラ部分は、隅から真ん中に向かって、まずわらと茅の束を載せていきます。どちらも根元が軒側になるようにします。細い竹でこれらを押さえながら、わら縄としゅろ縄でタルキに固定して締め付けます。(表紙写真)これを繰り返して茅を積みながら、ガンギで表面をたたいて傾斜を整えます。



◀カヤヌキ・ハサミ・ガンギ

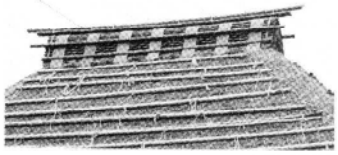
屋根が高くなっていくと足場が必要になります。先に穴が開いていて縄を通せる、ハリボウという金属の道具を使い、屋根の内側にいる人と表にいる人が声をかけあって差し位置を調整し、積み重ねた茅の上から縄を内側に通してタルキに結び付けます。この縄で、屋根表面に約30cmおきにアルキボウと呼ばれる足場の竹を取り付けながら、上へ上へと葺き上げていきます。

▲アルキボウを付けて葺いていく

葺きあがると続いて棟を作っていきます。棟は屋根の最も目立つところであり、屋根職人の腕の見せ所でもあります。

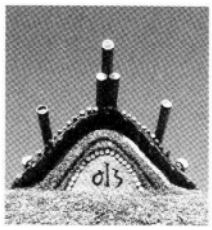
棟に束ねた茅を積み、水に浸して柔らかくした杉皮をかぶせて蓋をし、更に茅を積みます。棟の両端には、ガクといって文字を入れる部分を作ります。まず、棟の両端に束ねたわらをつけます。根元を外向きに、おむすび形の面を作るよう積み、わら縄を両側から二人で引っ張り合うようにしっかりと締め付けながら棟に付け、竹を割ったタガ、しゅろ縄、針金も使ってしっかりと留めます。おむすび型の面をハサミで刈って平らにします。これがガクです。ガクの周りを直径2～3cmの竹の節で囲みます。その上に更に積み、棟を形作りますが、棟端の見えるところは茅をバットより少し太めに束ね、針金で巻いて棒状にしたものを載せて、見栄えよく仕上げます。この上に杉皮をかぶせ、細い竹を棟を囲むよう、均等間隔で載せて留めます。竹を割ったものを帯状に並べ、均等に間を空けて棟と直角方向にかぶせ、両すそを半割りの竹で押さえます。棟のてっぺんに棟飾りとして太い竹を3本付け、両脇にも1本ずつ取り付けて形を整えます。

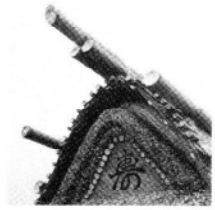
▲ガク表面を平らに刈る



▲棟飾り

ガクの中にハサミで字を刈り込み、墨を入れます。西側は「水」、東側は「寿」です。水は火に弱い茅葺の住宅を火災から守ってくれるように、寿は子孫繁栄の意味があります。さて、園内のほかの茅葺民家とは字が東西で逆になっているのですが、お気づきですか。これは水の字をかまどなど火の気のある土間側につけるためで、ほかの民家とこの住宅では、土間の位置が逆になっているからです。





▲スミを刈りあげる

次に四隅の軒から棟へ向かって茅の表面をハサミで刈り上げます。これによって屋根の傾斜を決めます。そして、ヒラ部分を棟から軒へ、今度はアルキボウを取り外しながら刈り下ろしていきます。厚みを見て足

りないところには茅を差すなど調整します。最後に軒部分を刈りそろえて、美しい茅葺屋根ができあがりました。

茅葺職人は、一人前になるまでに10年はかかるということで、今回作業してくださったのは、数少なくなった地元の職人さんです。

▲茅葺屋根の完成

◆壁

この建物の壁は、真壁（しんかべ）と呼ばれ、柱を出してその間だけ土壁にするものです。柱と柱の間に小舞と呼ばれる壁の芯になる部分を作ることから始まります。真竹を太さによって6つから8つに縦割りにし、幅1.5cmくらいの割竹を作ります。真竹を使うのは、孟宗竹に比べ、肉が薄く、柔軟性があって扱いやすいのだそうです。長さは2m弱のものと4m弱のものの2種類です。内側の節をナタで切り落とします。

柱と柱の内側には、竹をはめ込む刻みが4箇所ほど入れてあり、そこにまず短い竹を横に取り付けます。次に長い竹を縦に柱の間の通し貫に3本ほど釘付けます。この固定した縦横の竹を間渡（まわたし）竹といいます。

固定した横の間渡竹に1寸（約3cm）間隔で、縦の竹をわら縄で結わえ付けていきます。次に釘付けされている縦の間渡竹に横の竹を同じようにわら縄で結わえ付けます。竹はきっちり固定するよう、内側同士を合わせて組み合わせます。縦の竹は土台から1～2cmほど浮く長さにします。

▲わら縄で竹を組む

これは、後で壁土を載せたとき、その重さで若干下がってくるので、遊びを持たせるのです。すべての壁面に縦横の格子状の小舞を組むのは、根気の要る仕事です。

▲小舞

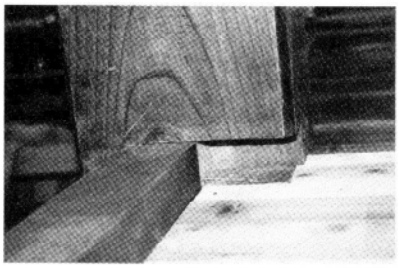
荒木田土（あらきだつち）と水にわらを3～4cmに刻んで入れ、適度な堅さに練り、壁土を作ります。これを小舞の表裏に鏝（こて）で塗ります。これを荒壁といい、下塗りにあたります。

▲荒壁塗り

荒壁をよく乾かします。乾燥が足りないと、芯の小舞が腐りやすいのです。乾かすには冬の寒風がよいのですが、水分が凍ってしまうと壁土の粘度が落ちて崩れてしまうので、冷え込みの強い夜には温風機を入れて、温度を調節していました。

◆内部

旧高野家住宅は、正面から見て右側が床上となります。まず、土台の上に平方向に半間おきくらいに大引（おおびき）をわたします。その上に直角に交差するよう、45cmおきくらいに根太（ねだ）を釘付けします。更にその上から、根太に直角になるよう、床板を張っていきます。



▲畳をはめ込んだ刻み

床上は、手前が8畳（ミセ）と奥の6畳に分かれます。この2間の境目の土間側に28cm角のケヤキの大黒柱がありますが、この大黒柱のミセ側に畳をはめ込んだ刻みがあることから、ミセは畳敷き、6畳は板の間となります。

次回は、完成までをお伝えします。

※『第26号』で、「この建物を購入したのは3代目の幸吉氏」としていましたが、「2代目の金三郎氏」の誤りでした。お詫びして訂正します。

浦和東ロータリークラブよりミズキを寄贈

ロータリークラブ100周年と浦和東ロータリークラブ35周年を記念して、ミズキ2本が寄贈され、平成17年2月24日（木）民家園内で植樹式が行われました。これに先立ち、ロイヤルパインズホテルで寄贈式が行われ、市長より感謝状が贈られました。ありがとうございました。